専門書の電子書籍化への取り組み

㈱大学教育出版　佐藤　守、渡邉純一郎、教育学部 中等教育学科 地村彰之

Keywords: 教養書・専門書の電子書籍、利活用のハイブリッド化

１．目的

2010 年は「デジタル出版元年」といわれている。iPad をはじめ様々な電子出版対応のデバイスが登場し、電子書店も名乗りをあげ、国をあげて電子出版を発展・普及させる土壌を作り始めた年といえる。2011 年度の電子出版物の売り上げは 650 億円であったが、2015 年度では約 1,600 億円弱と大きな伸びを見せている。日本では、雑誌等を中心に、専用端末利用というよりはまだ携帯電話等での販売が大勢を占めており、その傾向は変わっていない。

このような中で、雑誌系以外の電子書籍の普及と従来の紙媒体の書籍の役割は、どのように変容していくのであろうか。

２．電子出版の現状

日本の読者は、気持ちの上では紙を希望する割合が 7 割以上と多いのが現状であるが、雑誌を中心として電子出版物の売り上げは出版総売上の約 10%を占めるほどとなり、今後さらなる増加が見込まれている。

このような中、電子書籍等の販売店である電子書店は、当初は Amazon、IT 関係が参入していたが、現在は取次、書店（丸善、紀伊國屋…）等の多くが参入し、本格的な競争に入っている。

そもそも電子書籍の購入行為は利用権の行使であるが、端末の性能向上と書評サイト・立ち読み機能…等も付加され、その利便性も向上してきている。現在、教養書・専門書の電子書籍の購入を支えているは（大学）図書館であり、中でも教科書は、電子化による利用が始まっている。

３．今後の書籍出版の方向

これからもデバイス革命は進むが、人が創造するコンテンツは同じで、その消費の仕方が「所有」から「利用」とへ変化し始めている。つまり、紙の本で「所有」市場を狙う場合には付加価値が必要となり、他方、電子書籍では、多様な場面でその利用が可能となるであろう。

特に、学校・大学・博物館等の図書館での電子書籍の利用においては、社会教育に資する役割が期待されている。また学校・大学における電子教科書では利用シーンに合わせた活用と、他方必要に応じてオンデマンド印刷による紙媒体の教科書として利用するという、ハイブリッドな利活用が可能となるであろう。

つまり、紙媒体の書籍と電子書籍は、その役割を棲み分けて共存していくことになると考える。

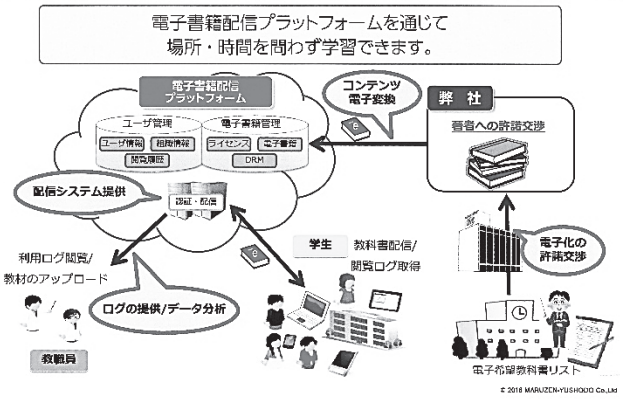

図 1　利活用のハイブリッド化

連絡先 TEL: 086-256-9604, E-mail: jimura@ped.ous.ac.jp